

From the Past to the Future



Continued after 2023

左上から『文藝春秋』大正12年1月号(復刻版)、2月号、3月号、大正15年9月号、『演劇新潮』昭和2年1月号、『映画時代』昭和2年7月号、『文藝春秋』昭和2年9月号、『文藝春秋オール讀物号』昭和6年4月号(復刻版)、菊池寛、『話』昭和8年4月号(復刻版)、『モダン日本』昭和9年10月号、『文藝春秋』昭和9年4月号、『文藝春秋』昭和18年8月号、『文藝春秋』昭和20年2月号、『文藝春秋』昭和21年6月号、『文藝春秋』昭和26年10月5日号、『文藝春秋』昭和54年9月号、『文學界』昭和58年10月号、『文藝春秋』平成13年1月号、『文藝春秋』令和5年1月号(いずれも菊池寛記念館蔵)

/ 菊池寛がつくった雑誌を見てんまい! \

編集:内田千裕(高松市歴史資料館)/福江成美(菊池寛記念館)/有友雅子(高松市石の民俗資料館)/味岡知津子(高松市香南歴史民俗郷土館)/仁木智恵(高松市讃岐国分寺跡資料館)/織田比呂子(高松市埋蔵文化財センター)
発行:高松市歴史資料館 令和5年(2023)3月

特集 これまでの100年 これからの100年

菊池寛記念館

菊池寛が創った雑誌の歴史

表面の写真は菊池寛が文藝春秋社で創刊、発行した雑誌です。菊池寛が一から創った雑誌もあれば、他社で発行されていたものを受け継いだ雑誌、会社の部下達が創った雑誌もあります。創刊から100周年を迎えた『文藝春秋』(大正12年(1923)1月発行)、『オール讀物』(昭和6年(1931)4月『文藝春秋』臨時増刊として発行)、『文學界』(昭和11年(1936)7月文藝堂より譲り受けた発行)は現在も発行されています。菊池寛から始まり、次の100年に向けて歩み続けています。



文藝春秋社で卓球をする菊池寛
(当館蔵)

讃岐国分寺跡資料館

100年で変わる風景



讃岐国分寺跡は昭和3年(1928)に国の史跡指定されました。上の写真は当時の様子が伺える大正14年(1925)に撮影の航空写真。現在の八十番札所である国分寺を含め、国分寺山門のすぐ南側を通る丸亀街道、街道沿いの門前を中心に商店や住宅が集中した門前町の姿、そして、東西北の3方には住宅がほとんどなく、古代讃岐国分寺の寺域と想定される区画が読み取れるなど周辺の様子がよくわかります。下の写真は昨年特別史跡指定70周年に際し、撮影されたもの。整備された讃岐国分寺跡史跡公園を住宅を取り囲んでいます。比較すると大きな変化に見えますが、中心の国分寺は寺院としてあり続けており、これからも法灯を繋ぎ歴史を重ねていくことでしょう。資料館・史跡公園も同じように古代の様子を伝え続けていきます。

※全ての予定は新型コロナウイルス感染対策などの諸事情により大幅に変更される場合があります。

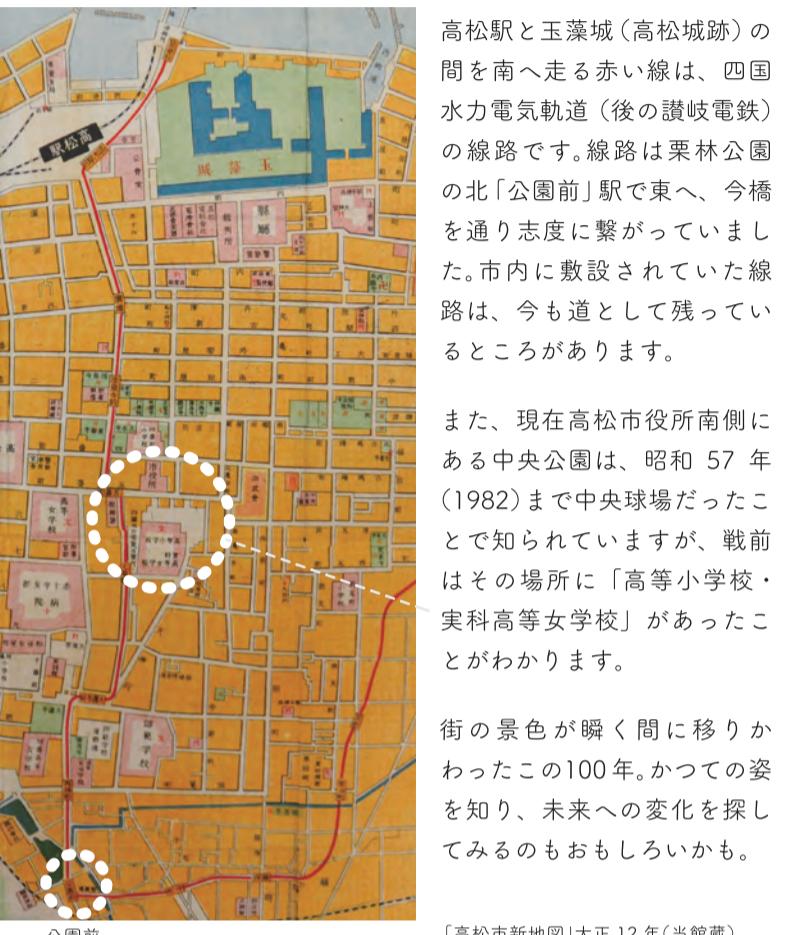
2023年度スケジュール	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
高松市歴史資料館	4/29～7/2 収蔵品展「高松と寛政異学の禁 中山城山が生きた時代」	7/22～9/3 企画展「カワイイ展(仮)」	9/23～11/19 企画展「近世高松の24時間 -200年前の暮らしを体感せよ-(仮)」	12/2～1/28 収蔵品展「アリとキリギリス -絵画の中の働く人・夢想する人-(仮)」								
菊池寛記念館	4/18～6/4 コレクション展 「牧野富太郎と菊池寛」	■「文藝むす」 第24号発売(6月下旬予定)	10/9 菊池寛記念館 特別講演会	2/10～3/17 菊池寛記念館第32回文学展 「菊池寛記念館収蔵品展(仮)」								
石の民俗資料館	4/22～5/28 企画展「宮脇慎太郎写真展 [Photo×book]」	7/22～8/27 企画展「うぶすな」	10/7～11/12 企画展「石の里の匠たち」	1/13～2/18 企画展「さぬき アートプロジェクト」	3/2～3/24 収蔵品展							
香南歴史民俗郷土館	■開館25周年!	6/3～7/2 企画展 「わが家のお宝展」	7/15～8/20 企画展「化石展」	8/25～9/22 企画展 -西岡コレクション から-	10/29～12/23 企画展 「たかまつ× SDGs(仮)」	1/4～1/16 企画展「生まれかわる 香南小学校 -記録写真展-(仮)」	1/19～2/14 企画展「篆刻展」					
讃岐国分寺跡資料館	4/29～7/2 埋蔵文化財展 「幻の国宝 美しき桜御門」	【前期】7/4～9/3 【後期】9/5～12/3 開館30周年記念企画展「讃岐国分寺・跡・資料館(仮)」	12/19～3/3 企画展「中山城山と国分寺(仮)」									
高松市埋蔵文化財センター	4/19～8/31【前期展】 「讃岐の古瓦・東讃編～岩佐コレクションを中心に～」	9/11～4/5【後期展】 瀬戸・高松広域連携中核都市圏④小豆島町×高松市 「石が結ぶ城と島II-高松城と大坂城の石丁場-(仮)」										

高松市歴史資料館・菊池寛記念館・石の民俗資料館・香南歴史民俗郷土館・讃岐国分寺跡資料館は月曜日(祝日が祝休日の場合は翌日)・年末年始(12/29～1/3)、高松市埋蔵文化財センターは土曜・日曜・祝日・年末年始(12/29～1/3)が休館日です。

高松市歴史資料館

地図でみる100年前の高松市街地

大正12年(1923)の地図で、100年前の高松の姿をみてみましょう。



「高松市新地図」大正12年(当館蔵)

石の民俗資料館

100年先も伝えたいモノ

当館の常設展示室では、今から100ほど前の大正末期から昭和初期の石工仕事の様子をジオラマで再現し、紹介しています。展示している石工用具は全て、当時、実際に使用されたもので、機械化以前の石工の知恵と工夫を伝えています。当館の収蔵資料のうち791点は「牟礼・庵治の石工用具」として国の重要有形民俗文化財に指定され、採石から加工までの全工程で使用された用具がそろった全国的に珍しいものです。

これらの用具は、昭和30年(1955)頃、石材業の機械化により徐々に使われなくなりました。そのなかで、手仕事の時代の知恵と工夫を伝えようと民俗研究者の高橋克夫氏の指導の下、牟礼町にある石材加工組合の青年部が中心となって、昭和55年(1980)頃より石工用具などの収集・整理を行いました。

当時集められた用具は、当館の収蔵資料の基となっています。この貴重な資料を保存し、牟礼町・庵治町の石工の歴史や文化を100年先も伝え続けていくことが資料館の役目と考えています。



高松市埋蔵文化財センター

100年前のおもてなし・・・

重要文化財披雲閣は史跡高松城跡
(玉藻公園)内にあります。観覧の際は別途お問い合わせください。



古写真(絵葉書)のデジタル彩色(大正時代の蘇鉄の間)

大正6年(1917)に旧松平家の別邸として完成した披雲閣には、大正11・12年(1922・1923)に英皇太子、摂政宮(昭和天皇)、久邇宮家の行啓がありました。現在耐震補強工事を進めている披雲閣では工事に伴い古い資料が見つかり、今回、この三大行啓時の室礼や各部屋の使われ方が明らかになりました。

英皇太子は大書院で能を観劇され、蘇鉄の間を御座所(居室)として使用、神戸から呼び寄せたボイイによりカクテルが供奉された、などなど…。

また今回蘇鉄の間の古写真に、当時の資料を参考にして室内景観を再現するデジタル彩色を実施。現代技術により、100年前のおもてなしの景観がよみがえりました。

※室礼:季節や年中行事に合わせ、調度品や装飾品で室内をふさわしく整えること

香南歴史民俗郷土館

郷土資料から考える防災 -地域のこれから100年に向けて-



旧池西消防団(元香川郡池西村)の《縄》を紹介します。時代劇でもお馴染みの縄は、火消しが火事場で火元や風向きを知らせるための道具でした。時代は移り、現場で用いられることはなくなりましたが、地域消防団の象徴として存在し続けました。頭頂部に池西の「池」が印された①の資料も「災害時に地域を守る消防団としての矜持」を示します。

他にも地域の災害関連資料を数点所蔵しています。②は、昭和26年(1951)に大型台風が2度襲来し、旧由佐村立中学校の校舎が大破したことや、復旧に向けた関係者の尽力の様子がわかる資料です。



そして本年は関東大震災(大正12年(1923))から100年の節目です。関東大震災は過去の遠い地域で起きた災害とはいきません。この機会に改めて「防災」について考えてみませんか?

郷土資料を通じ、地域の今や未来について市民の皆様と共に考え、【地域のこれから100年】に向けた活動を行っていきます。

※香川県内で大きな被害と揺れはなかったが、隣の徳島県では関東大震災における四国での最大震度4を記録した。(気象庁「関東大震災から100年」特設サイトより)翌1924年には現在の建築基準法の基となる耐震基準が規定され、関東大震災から100年後の私たちの生活やまちづくりの根幹へつながっている。